

株式会社KSK 様



【企業プロフィール】 (注：企業データは2013年3月末時点)

- 設立 1974年設立
- 本社所在地 東京都稲城市
- 資本金 14億4846万円
- 業務内容
 - ・システムコア事業 (半導体設計業務、組み込みソフト開発業務、サーバのハードウェア設計業務など)
 - ・ITソリューション事業 (システム構築、オンサイト運用保守などのサポート)
 - ・ネットワークサービス事業 (ネットワーク設計、構築、運用保守)
- 年商 125億2600万円 (連結/2013年3月末現在)
- 社員数 1,626名 (連結/2013年3月末現在)
- POWER EGG2.0 導入時期 2011年7月： POWER EGG2.0 Ver2.3導入
2013年3月末： POWER EGG2.0 Ver2.5にバージョンアップ
- 稼働ライセンス数 約500ライセンス (本社・技術センターのスタッフ、管理職、役員・経営陣が使用)
- 稼働機能 グループウェア、汎用申請ワークフロー、「気づき日報 (アドオン機能) 」



各拠点とのコミュニケーションツール 「気づき日報」で“現場業務の見える化”を実現！

システムコア事業、ITソリューション事業、ネットワークサービス事業を中心にユビキタステクノロジーを提供するKSK様。お客様の要望に応える幅広い技術力とチーム力が同社の強みである。中期経営計画【基軸V40】にちなみ、社内公募によって「軸」を意味する《AXIS》と命名されたパワーエッグは、そんな同社にあって日々の情報交流、「Team KSK」の推進に不可欠な基軸ポータルとして活用されている。

2013年3月末現在、稼働ライセンス数は約500。主に本社や各地に分散している技術センターのスタッフ、管理職、役員や経営トップなど約500人が業務処理・情報共有や稟議決裁・組織管理にパワーエッグを活用している。

▼取材ご協力者



(右) 取締役/管理本部長 牧野 信之 氏
(左) 管理本部情報システム室/リーダー 生田目 善行 氏

導入背景 トップ主導で「もっと効率化できないのか？」

KSK様は本社の他に拠点（支社、技術センター、分室など）が分かれています。

牧野取締役 「私どもの場合、管理本部がある稲城の本社の他に日本橋・新宿・府中・川崎など拠点が分かれています。そしてこのことが業務の効率化を阻む要因になっていました。つまり従来（パワーエッグ導入以前）は拠点間をまたぐ決裁の場合、PDFで稟議書を各拠点に送り決裁者に印鑑を押しもらってそれを次の拠点に送り、最終的に本社・管理本部に戻ってきてそれに押印する、という流れで稟議決裁の手続きをしていました。しかし、この状態は非常にムダというか非効率的だなぁと…。何か良いシステムワークフローを導入すれば何とかなのではないか、とそんな思いがありました」

— トップ主導で「もっと効率化できないのか？」 「何か方法はないのか？」

牧野取締役と同じ思いが、同社トップの河村具美社長もあつたようだ。

「もっと業務を効率化できるような方法はないのか？」
現場業務に精通し業務の効率化、決裁のスピード化を図ろうとする河村社長の主導のもとグループウェア・ワークフローの導入検討が開始された。2010年秋頃のことである。



代表取締役社長 河村 具美 氏

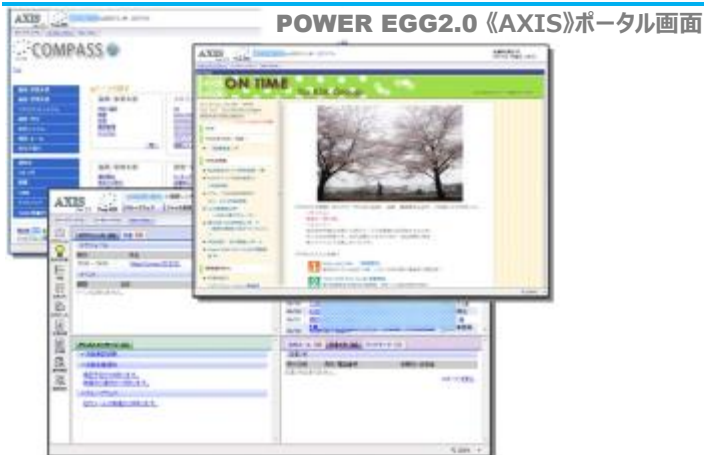
生田目リーダー 「社内に情報システム全般に関して検討する委員会があります。もちろん私たち情報システム室のメンバーも参加しています。その委員会に情報システム室から導入候補4製品を選び、各社にプレゼンしてもらい、委員の皆さんに日常業務の効率化を図れないかという観点で運用面の使い勝手が良いものを検討してもらいました。パワーエッグもその対象製品の1つでした」

選定ポイント 《見える化》の実現。『気づき日報』の実装しやすさ。

— POWER EGG2.0が評価されたポイントとは。

- 《見える化》の実現—稟議決裁のプロセス、ワークフローが見える
- 10年来使っている『気づき日報』の実装しやすさ
- シンプル4分割画面
- システム管理者のメンテナンス負荷が軽減

生田目リーダー 「パワーエッグが選ばれた理由、それはまず第1に《見える化》が実現することですね。とくに稟議決裁のプロセス、ワークフローが見えること、これが管理職のみならず経営トップ、つまり河村社長にも大好評でした。第2に、私も10年来使っている『気づき日報』という社内メールが載せやすかつたのも選定要因ですね。また私自身がユーザーとして見た場合、画面がシンプルに4分割され、ここには何がある、ここで何ができるがわかりやすく単純な点もいいですね。もちろんシステム管理者の立場としては、管理は必要だが手間が掛かるものではないという点も気に入りました」



『気づき日報』をパワーエッグ《AXIS》のしくみで展開。 “情報のフラット化”から“組織のフラット化”へ。

『気づき日報』は同社で10年来使われている社内メールの仕組みであり、拠点に点在する社員が自分の上司やチームの仲間に日報を送るもの。従来はEメールで送っており、定着していた仕組みである。定型のフォーマットはなく、今日の気づきをEメール報告するのが主な使い方だった。その『気づき日報』の機能を強化し提出率アップを図ることで効果をより高めることができないか。新たに導入するパワーエッグの中で『気づき日報』を展開できないか…。このような要望がありました。

一 効果1：『気づき日報』の「提出率」がアップ

Eメールからパワーエッグに変えることで『気づき日報』の提出率は格段にアップした。実は従来のEメールだと、出していないでも送信先以外の人にはわからないので、明日出せばいいか、という感じで各人のプッシュもそれほど高くなかった。ところがパワーエッグだと「誰が出したか、出していないか」が一目瞭然。提出率の良い部署、悪い部署がすぐ判別できる。だから毎日出さなくてはならない、出し洩れがあるとすぐに気づく。こうしてパワーエッグで展開することにより『気づき日報』提出定着化の動機付けが図られ、個人ごと、担当ごと、部署ごとの『気づき日報』提出率が格段にアップした。

生田目リーダー 「副次的な効果ですが、実は勤怠状況の把握にも役立っています。いちいち勤怠記録を見に行かなくても、ずっと『気づき日報』が出て来なければ「何らかの理由で書ける状況にないのでは？」という気づきを促すからです。“体調が悪くて休んでいるんじゃないか？”などと気づける訳です」

一 効果2：業務現場の現状が「見える化」される

従来のEメールだと、そのコミュニケーションはやり取りしているメンバーだけに閉ざされてしまっていた。ところがこのパワーエッグの場合だと、権限を設定することによって管理職が『気づき日報』を見に行くことが可能になった。役員が現場のやり取りに「一体何をやり取りしているんだろう？」と入って行ける。「報告として上げられた型にはまった情報」ではなく「ナマの情報、直接の上司とのやり取り」を役員が吸い上げられるようになったのである。



牧野取締役 情報対応のフラット化が実質的に進み、それが組織のフラット化を生んでいるという。つまりパワーエッグに載せられた『気づき日報』はTeamKSK 推進のエンジンにもなっている。経営トップが積極的に現場を見に行くというマインドを持てば、こうした仕組みで末端の動きをダイレクトに把握でき、その効果は非常に大きいと言えるだろう。

パワーエッグに載せることによって『気づき日報』は、現場業務見える化のために非常に有効なツールとなった。

一 効果3：「いつでも意見交換／いつでもミーティング」。 双方向のやり取りも活発に。

「見に行く」だけではなく、役員や管理職の双方向のやり取りも活発化しているという。そこで便利なのが「コメント機能」である。

生田目リーダー 「従来のEメールの場合、Excelファイルが添付で送られて来たら、こちらもExcelファイルに書いて送り返すという手間がありました。しかしコメントで追記すると、その手間が少ないので返事のリターン率が上がって来ます。今まで上司に日報を送ってもあまり返事がなかったのが、すぐに返事がある訳ですから必然的に日常コミュニケーションが促されます。

拠点が違うメンバー間で、チーム一体感を醸成するにはこのコミュニケーションが無視できないですね」

稟議決裁の見える化とスピード化が進む 「決裁しやすくなった」と管理職の評価。

一 稟議決裁の見える化。「一体どうなっているのだ」を解消。

- いまこの稟議はどこに回っているのか？ だれの所で止まっているのか？
- だれがこの稟議にどうコメントを入れたか？
- だれがいつ、何時何分に決裁したのか？

など稟議決裁の進行状況が見える化され、しかも決裁に至るまでの証跡が追える。だから内部統制という観点からも、ただ「印鑑を押す」という以上の意味がある。

一 稟議決裁のスピード化。

4日かかっていた稟議決裁が1.3～1.4日に短縮。

「稟議決裁に関するトップジャッジ、経営判断のスピードがものすごく早くなった」というのが牧野取締役の実感。

牧野取締役 「私の場合、日報だけで100件弱受けています。日報を見て問題がありそうならすぐに担当者に“これどういうこと？大丈夫？”“すぐ、こう対処してほしい”などと伝え、即座に動けるのでジャッジのスピードが上がり積み残しが出にくくなりました。また懸念事項に関する情報の部門間共有や役員間共有が進み、とくに社長の動きは早く“なんだ、まだ見ていないのか！”という感じで、上が先に動くから必然的に管理職の判断や行動もスピードアップを意識することになりますね」
「当社では月間1100～1200件の稟議書が決裁されていますが、いまではそのほとんどの稟議が1.3～1.4日で決裁されています。以前、PDFを送って役員の印鑑を押してもらって事業所を回っていた頃は、へたすると1週間くらいラクにかかっていたから、ホントにすごいスピードアップですね」

一 「起案しやすく審議しやすい」仕組みにもひと工夫を。

同社では全部で40種以上の汎用申請フォーマットが使われている。そしてそれらはいずれも、起案者の目から見ると非常に起案しやすくなっている。

例えば社員の派遣契約の場合、「派遣期間」「派遣の業務内容」など稟議書の中に入れるべきことがフォーマットに入っており、それにしたがってチェックしたり、記入したりする。そこに記入さえすれば、J-SOX上も、社内の規程遵守という観点からも、法の順守という観点からもポイントを押さえたカタチで起案が上がる。このように「統制」と「効率化」が一緒に出来るようになっているのだ。

また、「審議しやすい仕組み」にもひと工夫が行われている。2012年10月、大きな法令改正を契機に「審議者がより審議しやすいフォーマット」に変えたのだ。

「フォント（書体）を合わせる」「字の色を合わせる」「記入項目・チェック項目の並べ方を工夫する」など同じ基本的なルールを統一して、見やすく審議のポイントをチェックしやすいフォーマットに変えたのである。

一 内部統制面でも効果を発揮

パワーエッグのワークフローの活用により、稟議決裁に関して内部統制面での強化も図られている。社内の「内部監査室」はすべての起案を見られるが、従来は稟議書を探して引っ張り出してチェックしていた。それがいまでは、「検索」で効率化された。また従来の紙の起案書の場合、最終的に誰が決裁するかを起案者が決めていた。しかしそうすると、本当に決裁権限者まで行っているかどうかの問題が生じる。それがパワーエッグに乗せることで、起案内容によってルート設定がされているので本来の決裁者の所に行き着く、つまり正しい決裁が行われるようになった。このことは内部統制と同時に「決裁権限規程が守られる」という意味でのメリットも生んでいる。

今後の展開

「Webデータベースなど新機能の活用を検討」

今後の展開としては、Webデータベースの活用を思案している。ライセンスを保有する管理職全員があるテーマに関してのデータベースにアクセスでき有効活用して行けるような動きをいま準備中である。

ディサークル株式会社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-36-1
住友不動産千代田ファーストウイング
TEL:03-3514-6060 FAX:03-3514-6069
<http://www.d-circle.com/>



※POWER EGGはディサークル株式会社の登録商標です。
※その他記載されている会社名、製品名およびサービス名等は各社の登録商標または商標です。
※本事例に記載された情報は初掲載時のものであり、閲覧される時点では変更されている可能性があることをご了承ください。

取り扱いパートナー